連載

関係からみた子どものこころと育ち

第13回

成人期自閉症者にみられる醜貌恐怖の背景にあるもの

小林　隆児　Kobayashi Ryuji　大正大学人間学部臨床心理学科教授，くじらホスピタル

自分は醜く，母親は若くきれいだと訴える女性

M子：初診時25歳。

現在，母親と兄とM子の３人家族。

幼児期より自閉症としては知的発達も比較的良好で，家族の期待もあって高校入学までは順調な発達を遂げた。高校３年時，父親が病死。それでも就職することはできた。しかし，職場で対人関係をとることが困難で，１年余りで解雇された。当時，大都会（A市）に住んでいたが，家庭の事情により家族全員で母親の実家（B市）に戻ることになった。社会適応の改善をめざしてデイケアにも通ったが，引きこもり傾向が顕著となり，家庭で母親への暴力行為も出現したため，筆者のもとに受診となった。

初診時の印象：母親は実際の年齢よりはるかに若く見え，身なりも垢抜けている。M子も比較的大柄ではあったが，均整のとれた体型である。うつむきがちで視線を合わせない。生気に欠け無表情。質問に対して自分の主張をただ一方的に語るだけである。母親の言動にひどく敏感で，時に母親に冷たい視線を投げかけるため，母親はひどい恐怖心をいだいている。M子は自宅に引きこもりがちで自分の身体に対するとらわれも強い。とくに「自分は醜く，母は若くきれいだ」と母親を非難し，「兄や周囲の他人はみんなキリッとしていて，M子の目にきて悲しい気分になる」と言うなど，醜貌恐怖を思わせる訴えが強い。自分の視野のなかに人の目が入るのを極力回避する。人の話し声にも過敏に反応し，「大きい声（を出）されるとつらい」とメモに書いて手渡し，直接話すことは避ける。

治療経過：面接は２週に１回とし，最初にM子，その後母親に会うことにしたが，M子は同席を拒否した。計90回のセッションを実施し，治療終結となったものである。

M子の容姿へのとらわれと母子間の緊張の高まり

家庭内でのM子の衝動的行動はその後しばらく続いた。夜中に，寝ている母親に突然叩きかかる，テレビの音声をいやがり，すぐに消してしまうなど，母子間の緊張は高まる一方であった。M子は毎回，メモを筆者に渡していたが，その内容はいつも変わることなく，「まわりの人はちょっときれいに見える」「いつもやさしい声で話してください」など，容姿と人の声に対するとらわれであった。

小学生のころから似顔絵を描くのがとても上手で評判の子であったが，筆者がM子に自分の理想の人物像を描くように依頼し

ても，「描けない」と言って拒否していた(第9回)。目線が気になるのか，まな板に刻印された魚のマークのついた面をいつも裏返しにし，メンソレータム(薬品)のナースの絵を見て「この子はかわいいから」と言って手で覆ったり裏面を向けてしまうなど，現実の人のみならずあらゆる目が気になり，恐怖心を抱いていた(第10回)。

このころから少しずつ母親の口から，娘のことが語られ始めた。小中学生時代の娘は周囲の人々からも期待されていたが，それも過去のものとなり，いまは悲観的になって疲れきっている母親の心情が明らかになってきた。転居してからは世間体が気になって引きこもり，近所付き合いをまったくしていないという。母子ともに同じような心境であることが浮かび上がってきた(第13回)。

母子ともに抑うつ的になる

このころ，処方薬の変更によって少し明るくなったが，自宅では母親に「お母さんの顔がキリッとしているから」と言うなり母親に乱暴するなど，衝動的行動は続いた。いつも強気な姿を見せていた母親も抑うつ的になってきた(第33回)。M子も悲しみがどんどんひどくなると苦痛を訴え，薬をくれと要求するようになり，抗うつ剤が処方された(第37回)。すると視線回避傾向が減少し，筆者の似顔絵を初めて面接中に描いた(第41回)。自宅でも家事を自発的に行うなど，活動性が高まった。母親もこの変化を喜び，家族で旅行に出かけられるまでになった(第44回)。

母子関係は危機的状態へ

第60回，開口一番「悲しいの」と訴えるので，その理由を尋ねると，「お母さんがキリッとしているから」「いい顔しているのよ」「(母親の顔を見ると)どうしても悲しくなるの」「普通の顔(がいい)」「お母さんの顔がとくにきれいすぎるわ」「悲しいところを全部消してもらったらいい」と珍しく畳みかけるように語った。自宅でも母子間の緊張が高まり，母親は「いつも胃が緊張しているのがわかる」というほどに気弱になった。次回には自宅で「お母さんの言い方がバカ。お母さんの言い方がよすぎるから。やさしすぎるからバカ」と母親を怒鳴り散らし，「明日，一人で行ってこい！」と母親を罵倒し，ついに外来通院を拒否した(第61回)。母子関係は危機的状態になっていった。

母親の過去の回想；高い自我理想とやせ願望

このころになって母親は自分の過去を振り返り始めた。青年時代にいかに容姿にこだわっていたかを得意げに語る母親の姿はとくに印象的であった。母親は独身で21歳のころ，朝は何も食べず，昼もパンのみ，夕食だけ普通にとってやせることに努めていた。一時ひどくやせて無月経にまでなった。小学校時代はガリガリにやせていて，20歳を過ぎたころから急に太りだした。背が高いので太っていると言われなかったが，きれいになりたくて頑張ったと誇らしげに語った(第64回)。ダイエットをしていたころを思い出して，当時(昭和30年代前半)は食料事情もきわめて悪かったため，主治医から「こんなビタミン不足の時代にこんなことをやるのは馬鹿だ」と言われた。友人から「あなたは一所懸命やるのね」と言われたことを思い出して，自分は何事にも一所懸命やる性分で，学校行事にはすごく熱中してしまう。本来の自分以上のことを人に見せようとするところがあると言い，いままで「努力」を座右の銘にして頑張ってきたと語るのだった。母親自身，いまの娘と同じころ，高い自我理想を抱き，容姿にとらわれて，やせ願望が強かったことが明らかになった(第66回)。

母親の失意体験

母親は娘にも大きな期待をしていた。娘はみんなからもうらやましがられる存在で，期待の星だった。だからこの子の行動がいつも気になってしまい，なにかあるとすぐに反応していた(第68回)。しかし，このような充実した日々も父親の死によって急変してしまったと，力なく語るのだった。

こうして母親は自分の失意体験を語ることができるようになり，自らの生い立ちも述べるなかで，B市には中学から結婚するまで住んでいたこと，祖母は社交的な人で自ら商売を営み，男まさりで商魂にたけて，口八丁，手八丁のやり手だったと言うのだった。このような祖母に育てられた母親が高い自我理想をもつに至ったことは容易に想像できた。そうした環境で育ち，娘にも大きな期待をかけてきた自分が，いまのような境遇にいることを容易に受け止めることが困難であったのであろう(第68回)。

次回の第69回のセッションでは，母親からM子がメンソレータムのナース像を気にしなくなったことが語られた。M子は第61回から筆者に直接会うことを避けていたが，第70回から再び会

うようになった。

M子の心理的外傷

まもなくM子は過去の心理的外傷体験について語り始めた。「高校2年のとき，みんなの顔がキリッとなって，私の顔だけだらっとなってきて，みんなの顔を見れなくなったの。Kさんの身体つきが気になり，だんだん見られなくなってきた」〈どんなところか？〉「Kさんの胸が大きくなったところ。体育の時間に(見えたから)。自分の胸は中くらい」〈大きくなったらいいなと思ったの？〉「そんなことなかったよ。ちょっとつらいな。悲しくなった」とまで，そのとき受けた自分の気持ちを話すのだった。

この後，母親に面接内容を伝えると，母親は「Kさんはやさしい人で，美人ではなかったが，急に女らしくなって輝いて見えだしたのだろう。とてもいい子だった。Kさんの胸をどついたり，叩いたりしていたが，彼女はそれでもこの子にやさしくしてくれた」「高校2年のときは，この子は友人と学習のことに没頭していて，私の存在をあまり頼っていなかった」「高校1年のとき，父親が入退院を繰り返し，私は看病に専念していた。この子の思春期の不安を支えてやれなかった。私は当時そんな必要を感じる余裕がなかった。娘の心の不安よりも学習の手伝いや指導をしてやっていた。高校3年の秋に父親が死亡したとき，この子に目立った反応はなかった。私はこの子の学習指導に懸けていた。…発病の数カ月前，人間ドックに入ったときはどうもないと言われていたのに…悔やまれる」と涙ながらに切々と当時の思いを話すのだった(第76回)。

すると驚いたことに，まもなくM子はぎっしりと書き記した4枚のメモに，体育の時間にKさんの身体を見てショックを受けたことを書いて差し出した。「いつからそうなったかと言うと，高校の体育の時間にKさんの体が大きいのを気にして，バレーボール，バスケットボール，水泳があったときから人の体つきが気になり始めたのです」，さらに次回には「(悲しみが続く)理由は私，小さいときからいままでずーっと心も精神も不順で，私は昔からずーっと障碍があって，何となく私は幼稚くさいような頭で，勉強もまだきちんとできてなくて，目もおかしく見え，まゆ毛も下がっておかしくて，A市のとき，高校1～3年まで障碍研(障碍児のための特別編成学級)に入っていたから」と，高校に入学したときに受けたショックを記したのである(第78回)。

母子双方が影響し合っていることの気づき

その後，母親は，いま住んでいる地域の閉鎖性を嫌い，母親自身引け目をもっていて，内輪の話をしたくないと述べ，この子の小学生時代は将来を期待されていたので娘のプライドも高く，気も強かったこと，でも努力したのに報われなかったため，いまは外出するときはとても緊張してこわい，と言うのだった。「この子が緊張するのも私のせいかも。…1人で外出するときも緊張する。ここに来てからこうなった」と自分の気持ちと娘の気持ちがどこかで影響し合っていることを感じ始めている様子だった。

母親の喪の作業

転居後のそうした母親の変化を，M子は「母の姿が恰好よすぎたり，キリッと見えて私に合わない」「ここに来て1年経ったころから母の言葉がどんどん悪くなってきている」「ここに来て私も母も少し悲しかったと思います」と表現するまでになった。このように母子ともにB市へ転居後の失意をしだいに言語化するようになったので，筆者は母親にM子が面接で語った内容を伝えると，母親は「(私は)現在ストレスが激しい。神経質なところが増えた。昔のように大きく構えていない」と現在の心境を切々と率直に語り始め，自分は体調が悪く，ひどい食欲不振に陥っていると述べるのだった(第83回)。

次回でも母親は現在のつらさを語るなかで，誰も相談相手がいなくて心理的に孤立した状況にあることが明らかになった。さらには，自分は思春期のころとても潔癖な性格で，独身時代には極度なダイエットをしたことや，こうした気性は自分の母親の影響が強かったことを語り出した。思春期から肉感的な人には不潔感を抱き嫌悪していて，いまでも乳房が大きな女性を見るといやになる。だからM子は自分のことをお母さんらしくないと思っているのだろうと内省するのだった。こんな自分になったのは，M子が中学3年のとき，A市からB市に転居してからだと振り返り，当時から現在まで，M子は「B市に来てからお母さんは変わった」と盛んに言うようになった。A市では開けっ広げだったのに，B市に来てから周囲にどこか気取らざるを得なくなり，現在までそれを引きずっているというのだった(第84回)。

M子の回復

驚いたことに次回のセッションでM子は「買い物好きになったわ」と突然快活に母親に語り始め，一緒に買い物に行くようになった。面接でもM子は明らかに以前より明るく活動的になった(第86回)。その後も母親は過去を回想し続けた。自分はすぐに屁理屈を言って自分を素直に認めないところが強いが，夫がいたときは彼が自分をずいぶん柔軟にしてくれたと思う。夫の病気はショックだったが，ずっと看病したので大きなショックはなかった。夫が死んだ後，喫茶店を開こうと思ったので，車の免許と調理師の免許を取った。当時はこのように行動力があった。娘の仕事も学校の教師と一緒になって懸命になって探したと言う。さらに，母親は20歳のころ結婚前に，花嫁修行で洋裁学校に通っていた。スタイルがよく目立つ存在だったので，学校でモデルをした。校長からも期待される存在だった。そのためやせを追求していた。結婚してからは娘には手作りの洋服をいつも着せていた。役員もやりスーパーウーマンだったと言う。筆者が母親の苦労に同情の念を示すと，「でも人が思うほど，自分は苦労してきたとは思っていない」とすぐに反論するという一面は，相変わらず残っていた。そのことを伝えると，夫の存在の有り難みをつくづくと思い出す様子だった。いまの住まいには30年ぶりに帰ったが，周囲に親戚がいてつらい，過去の栄光が邪魔している，いまの姿を知られたくない。いつも誰かがそばにいてがんじがらめにしばられているような思いだと，いまの自分の救いようのない心情を率直に語り，涙にくれながら，自重ぎみに「私って，かわいくないですね」と述べるのだった(第89回)。

母子２人は一心同体

すると次回，M子はそれまでかたくなに拒否していた採血に対して，メモに「痛くないようにしてもらいたい。血を取るときは」と記し，初めて採血を自分から受けると言い出した。この契機となったのは，前回，歯の痛みを訴えるM子を筆者が勧めた歯科医院に母親が連れていき，そこで娘のことを素直に担当医に説明できたことで母親も安心し，M子の不安・緊張も和らいだことが関係していると推測された。興味深いことに，この歯科受診の直後から，M子は２日間，激しい腹痛を訴えていたということもわかった。しかし，その後，腹痛も治まり，自分から採血を受け，それまで見るのを拒んでいたテレビドラマを自分から見たがるようになった。さらに通院のためにバスに乗ろうとしたさいに，母親が年寄りに順番を譲るように伝えると，初めて素直に席を譲ったという。そんなM子を見て母親は「１つのハードルを越えて自信をつけたようだ。私もうれしい」と述べ，こうした母子の変わりようを自ら「(２人は)一心同体だと思う」と表現するのだった(第90回)。

醜貌恐怖発症の直接の契機

以上，数年間にわたる長期間の治療経過を述べたが，経過を振り返ってみたとき，本事例から学ぶことは多々あることに気づく。

M子は学童期から化粧に強い関心を示していたが，彼女が容姿にとらわれるようになった直接の契機は，高校２年時の第２次性徴にまつわる心理的外傷体験であった。当時唯一の友達であった女子生徒が自分より先に第２次性徴を迎え，彼女の膨らんだ乳房を見て，強いショックを受けている。元来プライドの高い彼女が高校時代，特殊編成の学級に入れられたことにショックを受けていたこととも相まって，このときを契機に強い容姿コンプレックスを抱くようになったのである。

日頃から容姿への強い関心をもっていたM子が，人一倍第２次性徴の発来を願っていたであろうことは容易に推測されるし，もっとも身近な友人に遅れをとったことはM子自身に相当に強い心理的ショックを与えずにはおかなかったのであろう。ここで興味深いのは，そうした外傷的体験を，治療経過中に手記のかたちで自分から赤裸々に語っていることである。

前思春期の不安；第２次性徴をどう受け止めるか

思春期を前にした(前思春期の)子どもたちは，第２次性徴という身体的変化を余儀なくされ，それをいかに自分のもととして受け止めながら思春期という発達期を送っていくか，誰にとっても大変な課題である。それまでの自分から新たな自分へと脱皮していかねばならないのであるから，そこで引き起こされる不安はそれまでに経験したことのない大変なものである。とりわけ女性においては，その変化が誰の目にも露わになりやすいために，より深刻化しやすい。

母親自身の性同一性を巡る葛藤

ただ，M子の不安がこれほどまでに深刻化した背景として考えなくてはならないのは，M子の身体や容姿への過度なとらわれが何によって生まれてきたかということである。つまりはM子の価値観がどのようにして獲得されてきたのかという問題である。

経過のなかで明らかになったように，母親自ら身体像への強いとらわれをもち，思春期に極端なやせを追求していたことが語られている。母親の青年期は昭和30年代前半であったが，現在のような飽食の時代とは異なり，食料事情はさほどよくなかったため，当時の母親の極度なダイエットは珍しかったのであろう。主治医が言ったように，実に「馬鹿げた」行為と映るものであった。このような行動の背景には思春期での女性らしさである性同一性の獲得をめぐって強い葛藤がはたらいていたのである。いまもなお乳房の大きな女性を見ると嫌悪感をいだくという母親の心理はそのことを裏づけている。

このような女性像にかかわる母親の価値観が，日々の生活でM子の心理に深い影響を与えたであろうことは，子どものころからはっきりとした目鼻立ちの女性の似顔絵を上手に描いていたことや，学童期から化粧に強い関心を示していたことからうかがうことができる。

前思春期不安を吸収してくれる存在の欠如

これまで本連載で繰り返し述べてきたように，前思春期に起こる情緒的混乱にまつわる不安が吸収されるためには，身近な親，とりわけ母親の存在が不可欠である。M子の例でも，心的外傷体験を受けたこの時期，母親は急病で倒れた父親の看病に忙殺され，なおかつM子に対してはそれまでと同様に，学習の援助を行うことに精力を傾けていた。このような要因が重なって，この時期M子の不安は吸収されることなく，その後も存続していったと思われるのである。

母親の高い自我理想の起源

母親自身の生い立ちから浮かび上がってきたのが自分の母親(M子の祖母)の存在の大きさである。男勝りで商魂にたけた万能的母親に育てられたことから，母親が自分の母親のようになるべく努力し，高い自我理想を抱くようになったのは容易に想像できる。母親は「努力」を座右の銘としながら，周囲からも期待された娘に自分の夢を託し，懸命に娘の学習援助を続けたのも当然のなりゆきであったのかもしれない。

母親の挫折と喪の作業

これまで懸命に努力してきた母親にとって，夫の病死と娘の失職は大きな挫折体験となり，失意のうちに故郷に戻っている。筆者が行った母親面接の中心的テーマは母親自身の喪の作業に対する心理的援助であった。それは，娘と自分を理想の姿をとおして見るのではなく，あるがままの姿を受け止めることができるように手助けすることであった。M子がいみじくも語ったように“B市に来てから変わった”母親に本来の姿を取り戻してもらうことでもあった。

母子の心理的なつながりの回復

面接はかなり難渋したが，しだいに母子関係に心理的なつながりが生まれていった。これまで高い自我理想のもと，懸命に肩肘張って生きてきた母親ではあったが，自分の気持ちと娘の気持ちがいかに深いところでつながっているかを実感するにつれ，しだいに肩の力が抜けていった。M子の容姿へのとらわれもしだいに緩和し，母親に対してこころが開かれ，素直な一面を表すようになっている。こうして初めて(と言ってもよいような)母子間に心理的な深いつながりが生まれていった。それは母親の実感として語られた「一心同体」そのものの体験だったのである。